

大好評
アカデミー出版の

超^翻訳

真夜中は

別の顔

下巻

シド・アイ・シエルダン作



THE OTHER SIDE OF MIDNIGHT

Copyright © 1988 by the Sheldon Literary Trust

First published 1990 in Japan

by Academy Shuppan Service Co.

All rights reserved including the rights

of reproduction in whole or in part in any form.

真夜中は別の顔
(下)

一九九〇年十一月十日 第一刷発行
一九九〇年十二月一日 第二刷発行
一九九〇年十二月二十日 第三刷発行

著者 シドニイ・シェルダン

訳者 天馬龍行
紀泰隆

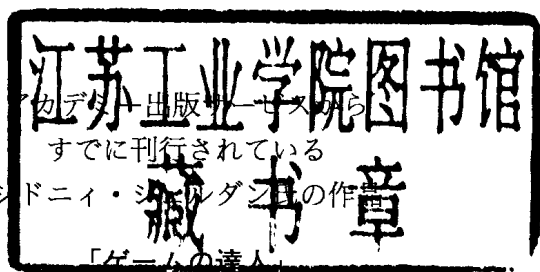
発行者 益子邦夫
発行所 アカデミー出版

東京都渋谷区鉢山町15-5
郵便番号 一五〇

電話 〇三(四九六)六六六六
FAX 〇三(四七六)一〇四四
〇三(七八〇)六三八五

印刷所 中央精版印刷株式会社

©1990 Academy Shuppan Service Inc.
INBN4-900430-11-0



「明日があるなら」

「時間の砂」

真夜中は別の顔 (下)

作・シドニィ・シエルダン

英意和訳・天馬龍行
日本語文章・紀 泰隆

〔第十章つづき〕

シャイダー將軍のリムジンがアパートの玄関から発つて五分後に、真つ黒なベントツがタイヤを軋ませながら同じ玄関前に急停車した。ミューラー大佐とゲシュタポの男たちが車から飛び出てきた。ミューラー大佐があわてた素ふりで道路の左右を確認した。

「連中は出発してしまつたぞ！」

大佐のこの一言が合図のように、ゲシュタポの男たちは建物のロビーの中になだれ込んだ。びつくりした顔をして雑役係が中から現われた。

「な、なんですか——？」

ミューラー大佐がいきなり雑役係の胸もとを突つついた。雑役係はよろけて自分の小さな部屋の中に後戻りした。

「パージ嬢だ！」

ゲシュタポの大佐が怒鳴った。

「あの女はどこにいる？」

雑役係は怯えきった表情で大佐の顔を見つめた。

「あ、あの人は、ど、どこかへ行きました」

「そんなことはわかつている、バカ者！ どこへ行つたか訊いているんだ！」

雑役係は途方に暮れたように首を横に振った。

「わかりません、ムツシュー。わたしが見たのは、パージさんが軍の偉い人と出かけるところだけですよ」

「行く先は言っていなかったか？」

「ノ、ノン、ムツシュー。パージさんはわたしを信用してくれないんです」

ミューラー大佐はおいぼれた老人を睨みつけると、かかとを蹴ってくるりと向きを変えた。

「やつらはそんな遠くまでは行っていないはずだ」

ゲシュタポ大佐が部下の男たちに命じた。

「全検問所と直ちに連絡を取れ。シャイダー將軍の車を見たらすぐ連絡するよう、それからわたしが駆けつけるまで、將軍の車を動かすなと伝えろ」

この時刻になると、動いている軍用車も少ない。ということとは、交通は極めてまばらということである。將軍の車はベルサイユ宮殿を横切つて、パリから出る西の道を走っていた。マンテを後に、ベルノンを通り、ガイオンを過ぎて、幹線道路の最初の分岐点に差しかかるころだった。

片やルアーブルへ、もう一方はビシー市に向かう道であり、残りの一本はコート・ダジュールに通じる道である。出発してから早くも二十五分が過ぎていた。

検問も障害もなくパリから出られるなど、ノエルには奇跡が起きたとしか思えなかった。ドイツ兵たちがいかに熱心で有能であっても、パリに通じるあらゆる道路を封鎖するなど、実際にはとても不可能なことだった。彼女が知らないだけで、車のやつと通れるような裏道や細い道が無数にあるのだ。

ノエルが奇跡だと思いつながら、走り過ぎる街の夜景を眺めていたとき、突然進行方向の闇の中に道路封鎖の光景が照らし出された。赤いライトが道路の中央で点滅し、そのライトの向こうでは大きな軍用トラックが、横向きになってハイウエイを塞いでいた。道路際には十二、三人のドイツ兵が立ち並び、フランスの警察車も二台止まっていた。少尉の肩章を付けたドイツ兵が手を振ってリムジンを止めた。車が止まると少尉は運転席に歩み寄った。

「車から降りろ！ 身分証明書を見たい」

後部の窓が開いて、将軍が顔を外に突き出した。将軍の一声が響き渡った。

「わしはシャイダー将軍だ！ いったい何の騒ぎだ？」

検問の少尉はギクリとなった。

「失礼いたしました、将軍。閣下の車とは気が付きませんでした」

将軍が道路封鎖に目をやりながら訊いた。

「なんなんだ、この騒ぎは？」

「はい、閣下。我々はパリから出る車をすべて検問するように命令されています。パリに通じるすべての道路で検問が敷かれているはずです」

將軍がノエルに顔を向けた。

「あのゲシュタポのやつらはどうしようもないな。不愉快な思いをさせて申し訳ない」

ノエルは自分の顔から血の気がサツと引くのがわかった。車の中の暗さに彼女は感謝した。ノエルが口を開いたときは、その口調は平静だった。

「わたしは構いませんわ」

ノエルはトランクの中の荷物のことを思った。計画どおりなら、イスラエル・カーツが息を潜めて中に入っているはずだ。次の瞬間には自分もイスラエルも捕えられているかもしれない。その光景がノエルの頭をよぎった。

ドイツ軍の少尉が運転手に向かって言った。

「おそれ入りますが、後ろのトランクを開けて下さい」

「カバンが入っているだけで、何もないぞ」

運転手の大尉が語気を荒げて説明した。

「自分で入れたんだから間違いない」

「すみません、大尉。パリを出る車はすべて調べるよう厳命を受けているんです。ですから、トランクを開けて下さい」

ぶつくと文句を言いながら運転手はドアを開け、外に出かかった。ノエルの頭は猛烈な勢い

で回転していた。なんとか二人を止めなくてはいけない、それも疑いを起こさせないような方法で。運転手は外に出てしまった。もう遅い。ノエルは將軍の顔をちらりと盗み見した。將軍はムカッとしているのか、目を細め、口をへの字に結んでいた。ノエルは將軍に顔を向けて何気なく言った。

「わたしたちも車から出ましようか、ハンス？ あなたも調べられるんでしょ？」

將軍の体が怒りでこわばるのがノエルにもわかった。

「やめろ！」

將軍の声が鞭の一打ちのように響いた。

「車に戻れ！」

將軍は運転手にそう命じてから、検問の少尉に顔を向けて怒鳴った。

「おまえが誰から命令されているのか知らんが、わしはドイツ軍最高責任者の將軍だ。少尉が將軍に命令できると思っているのか、バカ者。車をどけて道を開けろ！」

將軍の激怒した顔に圧倒されて、検問の少尉はすくみ上がった。彼は命令に應えてかかとで地面を蹴ると同時に言った。

「かしこまりました、將軍」

少尉が、道路を封鎖しているトラックの運転手に合図を送った。すぐトラックは道路脇に移動して道を開けた。

「行け！」

シャイダー將軍が命令した。車はスピードを上げ、暗闇の中へ消えていった。

ノエルはホツとして体を座席の背にもたれかけた。全身から緊張感が、破れた風船のように抜けていくのがわかった。危険は通り越した。今、彼女が知りたいのは、トランクの中に、はたしてイスラエル・カーツがいるのか、いたとしても生きているのかどうかだった。

將軍がノエルに顔を向けた。まだ彼の顔からは怒りの表情が完全には消えていなかった。「申し訳ない」

將軍が顔を歪めて言った。

「この戦争はちよつと奇妙なところがあつてね。全軍の指揮権を持つているのは指令部であることを、時々ゲシュタポに思い知らせなくてはならないんだ」

ノエルは笑顔で將軍の顔を見上げた。そして自分の腕を將軍の腕に絡ませながら言った。

「そしてその指令部を動かしているのが將軍というわけね」

「そのとおり」

將軍がうなずいた。

「全軍の最高責任者は將軍なんだ。ミューラー大佐にはいづれ教訓を与えねばなるまい」

將軍の車が道路封鎖を通過してから十分後に、ゲシュタポ本部から当の検問所に電話が入った。將軍の車を嚴重に見張れという伝達だった。

「もう通過してしまいましたか——」

検問所の少尉はそう報告しながら、不吉な予感で全身が汗ばむのを感じていた。彼の話し相手がすぐミューラー大佐に代わった。

「どのくらい前だったのかな？」

ゲシュタポの大佐はあくまでも隠かな口調で尋ねた。

「十分前です」

「將軍の車の中は調べたのか？」

少尉の腰から力が抜けた。

「い、いえ、大佐。將軍がお許しにならなかったもので——」

「バカ野郎！ それでどっちに向かったんだ？」

少尉は言葉に詰まって唾を飲み込んだ。ようやく喉から出てきた声には、自分の未来がなくなったことを知った男の、あきらめ切った響きがあった。

「はつきりわかりません」

少尉は答えた。

「この辺りで広い道路がいくつも交差していますから。將軍は内陸のルーアンに向かったかもしれませんし、海に向かったか、ルーアールに向かったかもしれません」

「なんなんだ、それは？ おまえからゆつくり話を聞きたい。明日の朝九時にゲシュタポ本部に出頭しろ。おれの事務所に直接こい！」

「かしこまりました」

少尉は力なく答えた。

ミューラー大佐は受話器を放り投げると、横にいた二人の男に向かって言った。

「ルアーブルだ。車を用意しろ。いよいよ『ゴキブリ』退治の本番だぞ！」

セーヌ川を何度も横切りながら、車はルアーブルに向かっていった。月明かりに照らされたセーヌ溪谷や周囲の丘、豊かな作物で覆われた広々とした畑が美しかった。空気の澄んだ、星の降るような夜だった。遠くに見える農家の集落の明りが、暗闇の中のオアシスのようにキラキラと輝いていた。

リムジンの心地よい座席では、将軍がしきりにノエルに話しかけていた。将軍は妻や子供のこと、軍人という仕事と家庭生活を両立させることは難しいことなどを話した。ノエルは話を聞いて将軍に同情したが、女優という仕事も、ロマンチックな生活とは両立しないことを教えた。二人とも、会話は一種のゲームと心得ていた。本心を悟られぬよう、話題はうわべだけに終始した。ノエルは、横に座っている男の頭の良さを一瞬たりとも軽んじることがなかった。自分が今、渦中にあるこの冒険がいかに危険なものかも忘れることがなかった。ノエルが急に会いたくなっ

て將軍に電話をしたと言っても、將軍がその言葉どおり信じるわけがない。頭の良い將軍のことだ、ノエルが何か代償を求めていることぐらい、先刻ご存じに違いない。ノエルが頼れるのは、このゲームをなんとか勝ち抜く、自分の意志と技量だけである。將軍は戦争についてほんの二言三言触れただけだったが、その中に、その後ノエルがいつまでも記憶する言葉があった。

「英国人というのは奇妙な人種だね」

將軍が言った。

「平和なときはお互い足を引つ張り合うくせに、いざ危険を前にすると、見事なほど団結しやがるんだ。英国の水兵たちは、自分たちの船が沈没しかかると、急に生き生きとなつて、力一杯仕事を始めるぐらいだからね」

一行の車が、エトルタの村に行く途中のルアーブルに着いたのは、夜明けにはまだ数時間残したときだった。

「ここで少し休んで、食事でもいただけません？　わたしもうおなかがペコペコなの」

ノエルがそう言くと、將軍がうなずいた。

「いいですよ。お望みならそうしましょう」

そう言ってから將軍は、運転手に向かつて言った。

「終夜営業のレストランを見つけてくれないか」

「栈橋のところに確か一件あったはずだわ」

ノエルが教えた。

運転手の大尉は車をＵターンさせると、ノエルに教えられたとおりに港に向けて走り出した。数隻の貨物船が係留されている栈橋まで来て、運転手は車を止めた。そこから一ブロック離れたところに、終夜営業の《ビストロ》の看板があつた。

大尉が外から座席のドアを開け、まずノエルが、続いて將軍が外に出た。

「ここは港の労働者のために一晚中開いているレストランなのよ、きつと」

ノエルが言つた。

急にエンジンの音がしたので、ノエルが振り返つた。荷物積み降ろし用のフォークリフトがリムジンの近くまで来て止まつた。フォークリフトから二人の男が降りてきたが、上下つながつた長い作業服とつばの広い帽子で男たちの顔は見えなかつた。一人の男は目を凝らしてノエルを見ていたが、やがて道具箱を取り出し、フォークリフトをガチャガチャいじり始めた。ノエルは胃が締めつけられるように痛くなつた。將軍の腕に自分の腕を回すと、ノエルはさつきとレストランに向かつて歩き出した。二、三歩行つてからノエルが車の方を振り返つた。運転手はハンドルを握つたまゝ座つていた。

「あの人にもコーヒーぐらい召し上がっていただいたら？」

ノエルが言つた。

「いや、大尉は車で待たせておく」

將軍が答えた。

ノエルは自分でも気付かずに、將軍の顔を見つめてしまった。運転手が車に残つていてはこれ

までの苦勞が水の泡になるだけでなく、自分も含めた関係者の命がこの世から消えることになるだろう。しかし、ノエルはあえて逆らわなかった。

二人は敷石のてこぼした道を歩いて店に向かった。と、突然ノエルは足を滑らせて転倒した。悲鳴に驚いて、將軍があわててノエルを支えようとしたが無駄だった。彼女の体は勢いよく敷石の上に転げた。

「大丈夫かね？」

將軍が心配そうに訊いた。

事の成り行きを見ていた運転手は、ハンドルから手を離し、車から出て急いで二人のところにやつて来た。

「ごめんなさい」

ノエルが謝った。

「わ、わたし、足首を曲げてしまったの。折れてしまったらしいわ」

シャイダー將軍は軍人らしい馴れた手つきでノエルの足首をさすった。

「歪みがないから、くじただけだろう。立てるかな？」

「わ、わからないわ」

ノエルが答えた。

運転手がノエルの横に来て、將軍と両脇から彼女を支えて起こした。ノエルは一步踏み出してみたが、また転げてしまった。